

日本人工臓器学会大会萌芽ポスターセッション

荒尾さん（大学院臨床
検査領域1年）に優秀賞

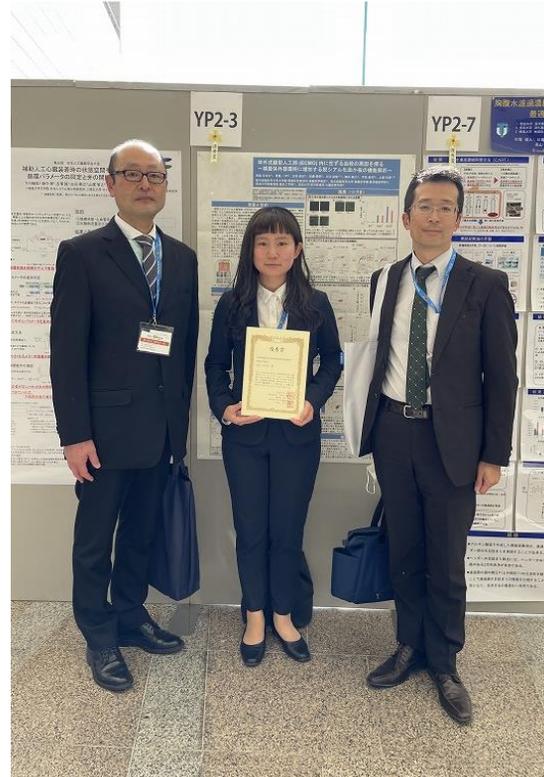
本学大学院医学検査領域1年の荒尾ほほみさん（上妻研究室）が11月3日（木）～5日（土）に愛媛県で開催された第60回日本人工臓器学会大会の萌芽研究ポスターセッションで優秀賞を受賞しました。

ポスターのタイトルは「体外式膜型人工肺（ECMO）内に生ずる血栓の原因を探る～模擬体外循環時に増加する脱シアル化血小板の機能解析～」。本学会の萌芽研究ポスターセッションは、エントリー後に選考が行われ、通過した演題のみ発表ができ、発表6分、質疑13分というあまり例のない形式で発表が行われました。

荒尾さんによると、研究は苦勞の連続だったそうで、「実験を行う中で、同じ失敗をして自分が嫌になったり、手にアザができることもありました」と明かしてくれました。また、初めてのポスター作製ということで、「なかなか先に進まず苦しい時もありました」と振り返っていました。

今後の目標については、「上妻先生をはじめ、いつもサポートしてくださる先生方への感謝の気持ちを忘れず、職域を超えて社会に貢献できる研究者、教育者になることです」と力強く語ってくれました。（安部悠介）

ECMOに生じる血栓原因探る



写真左から、共同研究者の古垣達也博士（筑波大学附属病院）、荒尾ほほみさん、上妻行則准教授。後方は、優秀賞に輝いた荒尾さんのポスター

神経難病のリハビリ 英専門誌に論文掲載

本学OB嶋本さん 病院勤務の傍ら研究継続

本学リハビリテーション学科理学療法学専攻の卒業生（2012年卒）でくまもと南部広域病院に所属する理学療法士、嶋本稔也さん（32）＝写真＝の論文が、リハビリテーションの専門誌 Annals of Rehabilitation Medicine (ARM) に掲載されました。

論文のタイトルは Effects of Intensive Exercise on Cognitive Dysfunction in Patients With Pure Cerebellar Degeneration: A single-Arm Pilot Study（純粋小脳型脊髄小脳変性症患者における認知機能障害に対する集中的な運動効果：単一パイロット試験）。修士論文をさらに磨いて英文化

したものです。

嶋本さんの専門は神経難病で、卒業後、同病院のリハビリテーション科に勤務しながら、本学大学院（飯山準一研究室）で修士号を取得しました。現在は熊本大学大学院の博士課程で研究を続けています。

英文誌への論文投稿は初めてで、嶋本さんは「神経難病のリハビリは歴史が浅いため、今後、神経難病のリハビリが当たり前になるよう、普及に努めたいと思います」とコメントを寄せてくれました。（安部悠介）



専門の枠を超え 症例検討、介入計画

4年次生計30班「チーム医療演習」発表会

学部4年次生の必修科目（保健科学基幹科目）「チーム医療演習」の集大成となる発表会が10日（木）、1300講義室Lと50周年記念館の2会場で実施され、総勢346人が30のグループに分かれ、活動の成果を発表しました。

チーム医療演習は、専門分野の異なる学生同士がグループ（11～12人）を組み、症例検討を行います。症例検討を通して相手の立場や違いを理解し、チーム医療を行う上で必要な相互理解を学ぶことを目的に、10月13日（木）から5週に渡って取り組んできました。

学生たちは、あらかじめ提示された模擬患者の基礎疾患や容態を分析し、それぞれの学生が専門の立場から患者に対してどのような介入が必要かを検討しました。

発表では、各グループが13分の持ち時間の

中で介入計画を発表しました。質疑応答では、会場から鋭い質問も飛び出しましたが、発表者たちは冷静に対応していました。

リハビリテーション学科理学療法学専攻の村里光一朗さんは「コロナ禍で他学科との交流が少ない中、チーム医療の大切さも学べ、臨床前のいい経験になりました」、看護学科の永石千尋さんは「他職種の多様なケアを積み重ねることでより高いケアに繋がることを感じました」と話していました。

担当した伊藤隆明教授は「学生たちが協力し合い症例をまとめ上げていく姿は、本学学生の資質の高さを感じさせ、とても頼もしく感じました」と評価していました。

（安部悠介）



真剣な表情で発表に耳を傾ける学生たち



演壇に立ち、症例検討から導き出した介入計画を発表する学生グループ

西里校区の井芹川清掃が13日（日）行われ、本学からも教職員と学生計52人が参加しました。校区の中心を流れ住民の憩いの場になっている井芹川の景観を、校区民が一体となって保とうというもので、ことして26回目。本学からの参加は11回目となります。

午前7時50分に1号館の前に集合した本学参加者は、簡単な説明を受けた後、軍手や移植ごてなど各自受け取り作業を開始。大学の敷地に面した川沿いの道路を端の方から真ん中へと攻めるように二手に分かれて除草作業を行い、草刈り機では刈ることのできなかった小さな雑草を取ったり、刈られた草を集めたりしていました。

約1時間の作業で集まった雑草はト

憩いの場をきれいに

西里校区 井芹川清掃

ラックで回収され、河川道路に面した花壇には花も植えられました。（リハビリテーション学科生活機能療法学専攻1年・岡村真来）



雑草を取り払った花壇に花を植える学生たち



医学検査学科 上妻 行則准教授

「臨床検査技師」という職業は、最近では新型コロナウイルス感染症の増加に伴い実施される PCR 検査を行っている職業として度々紹介されています。しかし、臨床検査技師はPCR 検査だけでなく、様々な病気の原因、からだの構造や機能の変化を物理的・化学的手段を用いて調べる医療専門職です。医師は、問診と身体所見、臨床検査技師が実施した検査結果などで得た多くの客観的情報をもとに総合的に患者の状態を判断し、診断を行います。従って、臨床検査は治療の入り口であると同時に、病気の経過観察や治療効果の判定、重大な病気の早期発見などに大きく貢献しています。

臨床検査は、大きく検体検査と生体検査の2つに分けられます。検体検査には、血液や尿をはじめ便、痰、骨髄液など体内のあらゆる部位に存在する体液中の各種細胞や物質の濃度や働きの測定や、組織の一部を採取し、がん細胞を検索する組織診断などがあります。一方、生体検査（生理機能検査）には、心電図検査、脳波検査、呼吸機能検査、超音波検査、MRI、聴力検査などがあります。

私が担当する「血液検査学」や「血栓止血検査学」は、検体検査の領域に含まれます。授業では、血液中に存在する赤血球、白血球、血小板などの血液細胞の機能を中心に基礎的知識を身につけ、さらには貧血、

検査法の原理・技術・判定法を指導

白血病、出血性・血栓性疾患など各種疾患の病態生理や、それらを分析するための検査法の意義・技術を学びます。

これらの講義を基礎として行われる各実習は、安全で正確な血液検体の扱い方、標本の作製方法や血液検査に不可欠な各種検査法の原理・技術・判定法などを習得するとともに、検査結果の解釈および臨床的意義についての知識を整理することを目標としています。

最終的には、医療人としての使命・職責を果たすために、学生自らが他者と協調することはもちろん、自ら関心や意欲を持ち学習することを通じて、主体的に問題解決できる技術力、科学的な思考力・判断力を身につけ、社会に貢献してほしいと考え、日々講義・実習を行っています。



「血液検査学」の講義をする上妻准教授

銀杏アラカルト



◆朝から交通安全の呼びかけ 学友会による交通安全の呼びかけ=写真=が14日(月)~18日(金)の5日間、学内外で行われました。1号館正面ロータリー前では、「自転車の左側走行」「徐行」などを呼びかけ、大学近くの交差点では、「運転中のイヤホン禁止」を呼びかけました。校内20km/h以下徐行、安全運転を心がけて欲しいと思います。(安部悠介)

◆学部社会人特別選抜、助産、大学院入試を実施 学部の社会人特別選抜(リハビリテーション学科)、助産別科推薦選抜、大学院推薦選抜・社会人選抜Iが5日(土)に実施されました。当日は天候にも恵まれ、滞りなく終了しました。数多くの方に受験いただ

き、心よりお礼申し上げます。合格発表は学部社会人選抜が12月1日(木)、助産別科推薦選抜は11月11日(金)、大学院推薦選抜・社会人選抜Iは11月18日(金)となっています。(入試・広報課)



就職・実習支援課 中村 美江さん

「偉大なる乳白色」下地の正体は

藤田嗣治（レオナルド＝ツグハル・フジタ/1886～1968）は、20世紀初頭にパリで活躍した画家です。20年来、私の最も好きな画家であり、裸婦像にみられる乳白色の肌、墨と筆を使った繊細な輪郭線に優美さを感じて止みません。

それゆえ、旅先の最寄りの美術館にフジタの作品が所蔵されていようものなら、観ることなく帰路に着くことは考えられません。美術に関心のない息子は、別行動してまでも実物を観ることにこだわってしまう私に、もはや諦め状態です。

実際に乳白色を間近で観ると、表面に微細な亀裂があることに気が付きます。ここに100年余という年月の経過とともに、経年変化も含めた全てが普遍的な美として存在することに感動を覚えます。フジタは、キャンバス全体にシッカロールを混ぜ込み乳白色を塗り、輪郭線を描き、陰影をつけて透き通る肌を表現したそうです。世界が認めた「偉大なる乳白色」の下地の正体が、実はシッカロールだったとは！



パリ郊外のヴェリエール＝バクルにある藤田嗣治のアトリエ

私のお薦め記事

（このコーナーはDive! LSP 1年生が担当しました）

水俣の遠隔診療 全国に発信 過疎問題シンポ 4市町で分科会

（2022年10月22日付熊本日日新聞16面）

概要

地域課題の解決を探る「全国過疎問題シンポジウム」の分科会が県内4会場であった。水俣会場では、水俣市が昨年度から取り組む、市医療センターと高齢化が進む山間部の診療所をオンラインで結ぶ実証事業を報告。医療センターの長井洋平・ICT医療推進センター長が「通院に伴う患者の時間的、身体的負担が減った」と話した。

（看護学科・古荘実央）

コメント

記事にある遠隔診療の実証事業のように、ICT医療の前進が見られる。離島にも総合病院などの手厚い医療が届けられ、病院に通う患者の身体的な負担が減ることは、さらに幅広い人々に医療を届けるとても画期的な仕組みである。医療現場だけではなく、企業や自治体など多くの人と協力することが、様々な人に手厚い医療を届けられるための近道になると考える。私達もこれからの医療に貢献していきたい。

（リハビリテーション学科生活機能療法学専攻・木村優月）

インフォメーション

週間行事予定（11月19日～11月25日）

11 / 19 (土)

学校推薦型選抜（指定校・公募）